

ヒエロニムス・ボス 《東方三博士の礼拝三連画》
「聖グレゴリウスのミサ」とエルサレム礼拝堂

杉山美耶子 (名古屋大学)

《東方三博士の礼拝三連画》はボスの作品の中でも注文主が特定されている稀有な一点である。2004 年に X. デュケンヌが特定したように、「東方三博士の礼拝」を表す開翼時の両翼には、アントワープの中産階級市民であるペーテル・シェイフェと、彼の二番目の妻アニエス・デ・グラムが跪く。閉翼時にグリザイユで描かれた「聖グレゴリウスのミサ」には、息子ヤンと、議論が分かれるところではあるが、ペーテルの義父ペーテル・デ・グラム、或いは実父クラウス・シェイフェが跪く。ペーテルの最初の妻が 1491 年に亡くなり、アニエスが 1496 年から 98 年の間に没していることから、作品の制作年は 1490 から 98 年頃、特にペーテルがアントワープの織物ギルドに加入した 1494 年頃の制作という意見で研究者の見解は一致している。

キリストの犠牲と贖罪を象徴する予型論的モチーフで満たされた「東方三博士の礼拝」に関しては多くの先行研究があるのに対し、「聖グレゴリウスのミサ」は研究者の大きな関心を集めることはなかった。しかし近年、R.ファルケンブルクが指摘したように、ここで画家は特異なモチーフを描き出している。祭壇上の石棺から身を起こすキリストの背後に高くそびえる、ゴルゴタの丘を模した祭壇衝立である。衝立の前面には左右下部より「ゲッセマネの祈り」、「キリストの捕縛」、「ピラトの前のキリスト」、「鞭打ち」、「茨の冠」、「十字架の道行」が表され、丘の頂上には「磔刑」が描かれる。受難伝の時間的流れと高まる緊張感を、上昇していくゴルゴタの丘の形状と見事に対応させているといえよう。

キリストの受難の場面が、立体的なゴルゴタの丘と同化し、更にそれが具体的な礼拝空間に設置されたモニュメンタルな祭壇衝立と化している本表現を、ファルケンブルクは「ボスの類まれなる発明」と見なした。その上で、同氏はその靈感源を磔刑が表された同時代の木彫彫刻に求め、諸作品との比較を試みている。しかしここで注目すべきは、この祭壇衝立が、ネーデルラントで一般的であった翼画を伴う形式ではなく、ゴルゴタの丘を模した形状をしているという点である。ゴルゴタの丘の形状が受難のモチーフと同化し、具体的な礼拝空間に組み込まれているという点で、ブリュージュのエルサレム礼拝堂 (アドルネス一族礼拝堂、1480 年代初頭) の祭壇衝立を指摘しないわけにはいかないだろう。本発表では両祭壇衝立における図像的類似性を指摘したうえで、注文主とアドルネス一族の接点を検証する。また、従来エルサレム礼拝堂の機能は、聖地への霊的巡礼を促す点にあるとされてきたが、ボスの作品との比較から、同礼拝堂が聖徒の交わり (sacramental communion) の空間であると同時に、祭壇上に一聖グレゴリウスの幻視のごとく一キリストを霊的に視るための霊的交わり (spiritual communion) の空間であった可能性を指摘する。